

『暗夜行路』論--大山のクライマックスに関する一考察

著者	花岡 千月
雑誌名	清心語文
号	4
ページ	146-155
発行年	2002-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000335/

『暗夜行路』論

——大山のクライマックスに関する一考察——

花岡 千月

一 はじめに

志賀直哉の文学を考えるうえで、「母への思慕」というモチーフは欠くことのできない重要な問題の一つである。このモチーフを『暗夜行路』においても重要視し、『暗夜行路』を「母を恋うる記」だとする見解が多く提出されている。例えば、進藤純孝は次のように述べている。

謙作の父に対する気持ちも、お栄に対する気持ちも、直子に対する気持ちも、煮つめてみれば、彼が六歳のときに失った母を恋う心の変型なのである。もう少し突っ込んでいうなら、死んだ母の中にあった、謙作の孤独に触れて来る温かみを、限りなく恋う心が、父との不和、お栄への慕情、直子との和解となつて、『暗夜行路』一篇をつむいだのである。

そして、おそらく、直哉もまた、一三歳のときに失った母を、心から慕い愛し、意識せずして、母恋いうたを小説として結晶していったのに違いない。いうまでもなく、それは雄々しい母恋い

うたである（注¹）。

謙作の行為を「母恋い」に拠るものとし、そこに作者志賀直哉の実人生の影響を見ているこのような論考に対して、三好行雄は、「母を恋うるのではなくて、母の記憶に追いかけられながら母から逃げてゆく」

（注²）物語であると主張している。

果たして『暗夜行路』という作品において、母という問題はどのように扱われているのだろうか。本稿は、特に大山のクライマックスを主として考察を試みるものである。

二 尾道と大山

『暗夜行路』の中に描かれているいくつかの旅の中で、重要な旅として前編の尾道行きと後編の大山行きがある。これらの旅は、主人公時任謙作が問題に直面した時において実行された大掛かりな旅であり、一見どちらも現実逃避の要素を含んでいるという印象を与える。

まず尾道行きは、謙作に降りかかった多くの苦悩の中でも、特にお

榮への性的衝動を、お榮と距離を置くことで解消するために思い付かれた旅だった。しかし、旅先で孤独感を募らせた謙作が、お榮との結婚を決意し、そのことによって祖父の子供であるという謙作の出生の秘密が明らかになり、また新たな苦悩を抱え込むことになった。お榮への性的衝動は全く解消されず、その後、直子との結婚が決まった後の京都でもお榮への性的衝動に苦しめられ、謙作の尾道行きは、直面していた問題に対しては、一時の現実逃避に過ぎなかったと言えるだろう。

また大山行きも、従兄妹の要に犯された妻直子を救うことが出来ない苦しみから抜け出す方法として再び思い付かれた旅だったが、直子との生活の中で解決していくという葛藤のドラマは放棄され、謙作は一人で旅に出た。尾道行き、大山行きのどちらの旅も、問題と直接向き合うことを避け、現実逃避している傾向が窺えるが、後編の大山行きは、不義を犯した直子を赦す境地にまで到達するという結末になっており、何の打開策ももたらさなかった尾道行きとは明らかに違う旅であると言える。

だが、これらの二つの旅の違いは、旅の結末の違いというだけではなく、行き先の選び方や旅に向かうとする謙作の心構え・目的意識にも表れている。

まず尾道行きは、行き先も目的意識も曖昧なまま決意されている。

「前略」何故なら若しかしたら僕は暫く旅行しようかと思つてる」

「何処へ？」お榮は一寸意外な顔をした。

「はつきり場所をきめてないんですが、半年か一年、何処か地方へ行つて住まはうかと思ふんです」

「又、どうして不意にそんな事を考へ出したの？」

「さうだな、さうはつきりした理由もないが、兎に角僕はもう少し生活をどうかしなければ駄目なんです」

（中略）

「だけでも——全体何故なのかしら？」 此処ぢやあ、勉強が出来ないんですか？」

「さうあんまり問ひつめられると困るが、そんな事でもして氣を更へる必要があるんですよ」

（中略）

「一言にいへば純粹に一人になりたいんですよ。友達からも自家の人からも、それから誰からも」（第一の十二）

日増しに募るお榮への性的衝動を対処するために、とにかくお榮と距離を置かなければならないという危機感が謙作にはあり、尾道行きは、言わば場当たりの旅だと言える。尾道に決めた理由も、千光寺への道を尋ねた子供や三軒長屋のお婆さんが親切だったという理由で偶然決められたに過ぎない（注3）。

一方大山行きは、直子との結婚が決まった後もお榮への性的衝動を引きずっていた謙作に新たに降りかかった、犯された妻を救うことが出来ないという問題を解決するために実行された旅である。尾道行きとは違い、行き先が事前に決められ、また目的意識らしいものが会話

の中で話されている。まず直子に別居を持ち掛け、不服そうな直子を納得させるように、謙作は「それでお互に気持も身体も健康になって、又新しい生活が始められれば此上ない事だ。俺は屹度さうして見せる」と直子に告げた。そしてお栄にも旅に出ることを報告したが、お栄が反対したために、尾道行きとの違いを説明し、行き先を知らせている。

「第一尾道行とは動機が幾らか異ふんですがね。あれは出来ない仕事を無理にやろうとして失敗したが、今度は仕事は第二で自分の精神修養とか健康回復とかいふのが目的なんだから、別居といふと大袈裟に聞こえるが、何も別に家を持つといふのではなく、保養に旅へ出た位に思つて貰へばいいんですよ」

(中略)

「伯耆の大山へ行かうと思ふんです。先年古市の酒屋で一緒になつた鳥取の県会議員がしきりに自慢してゐた山だ。天台の霊場とかで、寺で泊めて呉れるらしい。今の気持からいふとさう云ふ寺なんか却つていいかもしれない」(第四の十)

さらに謙作は、出発に際して直子に「これほど縁起のいい事はないさ。即身成仏、と云つてこのまま仏様になるんだ。帰つて来ると俺の頭の上に後光がさしてゐるから……。〔後略〕と、〔出家〕くらしいの心構えで話し、尾道行きのことを思い出して心配するお栄にも、「大丈夫。何も彼も卒業して、人間が變つて還つて来ますよ」(第四の十一)と安心させている。

このように大山に行く目的意識として、やや冗談めかして言つた雰

囲気を感じられなくもないが、謙作には、「新しい生活」を始めるために「精神修養」・「健康回復」をし、「即身成仏」を遂げ、「何も彼も卒業」して帰つて来たいという意識がある。そして、行き先の大山については、「天台の霊場」という説明がされ、そのことが大山を選んだ理由として挙げられており、場当たりの尾道行きとは違ふ旅であると言える。その後謙作は実際大山に行くが、途中車夫に「寺は精進か?」と尋ね、「いや、生臭でも何でも食はすよ。梵妻もゐるし、開けたもんだ。坊主は馬の売り買ひばかり熱心にやつてゐらあね」(第四の十三)と聞いて「落胆した」り、大山で知り合つた竹さんの妻の「痴情の争」を知つて「興醒」したりしている。このことは、謙作が「叡山に次ぐ天台の霊場」である大山に、かなりの期待を抱いて旅先に選んでゐたということを逆に示しているだろう。しかし、それにしても謙作は本当のところなぜ大山を選んだのだろうか。

三 大山の意味

謙作が行き先に選んだ大山とはどのような山なのだろうか。謙作自身は「叡山に次ぐ天台の霊場」という認識を持つており、その期待が裏切られたという実感を大山で抱いている。大山は、山陰地方を代表する霊山であり、かつて修験道の道場だった山で、死者・祖霊を導くという地藏菩薩を持ち、「死霊の赴く山」として、死後、死者の霊が四九日の間止まると信じられたり、死者に逢えるという信仰を集めた山

である^(注10)。そして冥途との境界とされる賽の河原があり、山中他界

^(注11)として意識されていた。修験者は、この世から山中の他界に赴いて、一度象徴的に死んだ上で修行をし、また山を下りることで象徴的に再生して新しい宗教者となった^(注12)。謙作が、大山行きの目的を「精神修養」だとし、「即身成仏」とか「何も彼も卒業して、人間が變つて還つて来ますよ」と告げて山中他界である大山を行き先に選んで旅立ったことを考え合わせると、謙作はまるで修験者のように、「死」と「再生」を遂げるために大山に行ったのではないか。さらに「死霊の赴く、死者に逢える山」としての大山に着目して謙作の大山行きを捉え直してみると、謙作は、自身が六歳の時、産後の病気で死んだという母に会いに行ったとも考えることが出来るのではないだろうか。

しかしそれは、今までよく論じられてきた「母恋い」という意味での母との再会を求めている旅というわけではない。三木利英は、謙作の大山行きに関して、次のように指摘している。

それが妻の不義事件で非常に家庭が不愉快になり、妻を汽車から突とばして怪我をさせたりしたので、謙作が逃避する世界は、母の想い出しかなかった。それで別居に大不賛成だったお栄から「何処へ行く気なの？」となじられたとき、彼はいきなり「伯耆の大山へ行かうと思ふんです」と偶然的に答えたと見るべきであろう。それは全く情念的行為で、マザー・コンプレックスといった病理学的もしくは神的な秩序に属する突然の衝動にかられたものである。(中略)「暗夜行路」は或る意味で、薄幸のうちにこの世

を去った母の菩提を弔う、一種の西国遍路であったともみられる

^(注13)

謙作が「母の想い出」に「逃避」するために大山に行ったとするこの三木利英の指摘は、「母恋い」の延長線上に大山行きを捉えて論じている。

しかしながら、謙作の大山行きまでも、当然のように「母恋い」が繰返されたものとして片付けてしまっているのだろうか。確かに謙作には、母を求めていると思われる行動がいくつもあった。

まず、愛子に結婚を申し込んだことについても、愛子の母が、謙作の母方の祖父母を養父母として育ち、謙作の母とは幼馴染だったため、母の死後、謙作はよく愛子の母から思ひ出話を聞いていた。謙作は「何となく亡き母の面影を愛子の母に見て居た」(第一の五)のである。それが母の十三回忌の時、決定的なものになる。

(前略) 愛子の母が旧式な大小小紋に黒婦子の丸帯を締めて来て居るのを見た。其姿が彼の心に不思議な懐かしさを起した。彼は何気なく其姿に時々眼をやつて居た。すると、何かの機会に偶然並んだ愛子の母が其着物の袖を引いて見せて、

「これも、帯も、今日のお仏様の御遺物^{おたま}ですよ」と云つた。彼は妙な氣持になつた。一種の感じに打たれた。(第一の五)

この時謙作には、実母と愛子の母が完全に重なって見えていた。そして母の姿を重ね合わせた人の娘に求婚し、思わぬ形で断られる。

謙作の心を受けた傷は案外に深かつた。それは失恋よりも、人

生に対する或る失望を強ひられる点でこたへた。(中略) 只一番こたへたのは愛子の母の気持であつた。日頃其行為を信じ切つて居ただけに、此結果になると、其好意とは全体如何云ふもののだつたかが彼には全く解らなくなつた。断られるまでも何か好意らしいものを見せられたら彼はまだ満足出来た。所が、それらしいものも全て見せられずに彼は突き放された。彼は不思議な気がした。

(第一の五)

愛子への求婚が断られ、謙作が深く傷付いたのは、愛子と結婚できなかったからではなく、兄の慶太郎がまわりくどい嘘で断つてきたからでもなく、「只一番こたへたのは愛子の母の気持であつた」とあるように、母の姿を重ね合わせて慕つていた愛子の母に裏切られたからである。少なくともそのことが、謙作を一番傷付けたと言えよう。つまり愛子への求婚は、愛子というよりもその母に近付きたかつたからであり、謙作の母性愛を求める気持ちが形を変えて表れたものだったと考えられるのである。

さらに、お栄に対する行動にも、謙作が母性愛を求めていたことが窺える。六歳で母を亡くし、一人だけ祖父の家に引き取られた謙作にとって、お栄は母親代わりだった。愛子の母に冷たく突き放された謙作が、「其懷に抱かれるやうな気持で、自分を投げかけて」(第一の五行きたいと感じたのもお栄であつたし、お栄が天津に行くことになつた時も、「こんなにして別れて了ふのは、つまらないと云ふ駄々つ兄のやうな我儘な気持」(第三の六) が起こつたりした。そして謙作は、お

栄に対して性的衝動まで抱いている。お栄に対して起こる性的衝動は、いわゆるエディプス・コンプレックスの変型したものと考えられるが、それは謙作が実母から得られるはずであつた母性愛が満足に得られず、満たされなかつた母性愛を他のもので埋め合わせようとした時に起こってくる性的衝動であるとも考えられる。

このように、謙作は母性愛を求めてさまよい、母親探しをしていたのである。謙作は祖父と母との間に生まれた子供という出生の事情から、兄弟の中でも常に不公平に扱われ、愛情を注いであつたのは只母一人だけであつた。けれども、その愛情も謙作の気持ちを満たしてくれる程のものではなく、その上、その母を幼くして亡くしてしまったために、人並以上に母に執着せざるを得ない状況に謙作は置かれていたのである。

そのような謙作ではあつたが、妻の直子が従兄妹の要に犯されたと知つた時、あることに気付かされる。「自身の過去が常に何かとの争闘であつた事を考えへ、それが結局外界のものとの争闘ではなく、自身の内にあるさういふものとの争闘であつた」(第四の六) ということに。

謙作は、今まで様々な苦悩を味わつてきた。愛子への求婚が理不尽な形で断られ、そのことによつて人間不信に陥つた時も、お栄への性的衝動に苦しめられて尾道へ行き、孤独に耐えられなくなつてお栄に求婚して自分の出生の秘密を知り人生に絶望した時も、そしてようやく立ち直つて直子との結婚生活をスタートさせ、幸福を掴んだかと思

うと子供を病気で亡くし、妻が犯されるという事件が起きた時も、謙作は「外界のもの」とではなく、「自身の内にあるさういふもの」と闘っていたことに気付いた。謙作の「結局一人角力」に過ぎなかったというこの回想は、これらの苦悩を自身の暗い出生から始まった運命のだと勝手に決め付けた自分自身と、必死に格闘してきたということだったのではないだろうか。

大山行きの直接のきっかけとなったのは、妻の直子が従兄妹の要に犯され、それを赦すことが出来ず、直子に当たり始めた自分自身を謙作が持て余したからであり、そしてその目的もそんな自分自身を「精神修養」させ、直子を赦す境地にまで到達することだった。

しかし、それまでの積み重なった苦悩の数々を運命と決め付け、一人で闘っていた自分自身に気付き、「自身の内に住むものとの争闘で生涯を終る。それ位なら生れて来ない方がましだった」(第四の六)と思い始めた謙作には、繰返されてゆく不幸な出来事に終止符を打ち、直子との人生を本気でやり直すことこそ、一番果たしたい目的だったはずである。三木利英の指摘にあるような、「母の想い出」に「逃避」という後ろ向きな旅ではなかっただろう。

すでに述べたように、謙作には確かに母への執着が強かった。そのため母親探しを繰返してきたわけだが、謙作が今まで運命と決め付けて闘っていた出来事には、謙作のその母親探しによって引き起こされたものが多いのである^(注9)。

まず愛子への求婚が断られ、その母の冷たい態度によって裏切られ

たとショックを受けたこともそうであるし、謙作が衝撃を受けた自身の出生の秘密を知ることになったのも、苦しい時、母を思い出すように、旅先での孤独からお栄に会いたくなり、「気持の上では殆ど肉親の近きにあるながら、本郷の父が決めた関係、依然雇人、そして自分の結婚と同時に身を退く^ひ苦の女として、何故二人共がそれを無条件に認めてゐるのだらう。」(第二の五)という疑問が湧き、お栄に求婚したことがきっかけとなったわけであり、つまりお栄への求婚も謙作の母親探しと考えていいだろう。そして直子が犯されたことについても、直子に対して、「あなたはそれでいいよ。然しこつちまで一緒にそんな気になるのは御免だ。実際仕方がないぢやあないか」(中略)「それより僕は近頃お栄さんの事が少し心配になつて来たんだ。此方^{こつち}には全^{まる}て便りを寄越さないし、前の関係から云つて信さんに任せつきりといふわけには行かないから、その内一度朝鮮へ行つて来ようと思ふんだ」(第四の一)と、子供を失つてショックを受けている妻を置き去りにしてまでお栄を迎えに行くという、謙作の母親探しが引き起こしたことになる。

だからこそ、謙作が運命と決め付けた出来事を克服し、終止符を打とうとする時、母への執着を断ち切るということが不可欠な条件となる。謙作にとって、人生を新しくやり直すことは、母から卒業することなのである。「一人角力」だった人生を顧み、「前略」何も彼も卒業して、人間が變つて還つて来ますよ」(第四の十一)と言った謙作には、母からの「卒業」が意識されていたのではないだろうか。そ

して謙作は、その場所として「死霊の赴く、死者に逢える山」という大山を選んだ。そこで謙作は、今まで何度も繰返してきた、母を求めるという意味での再会ではなく、やはり母から「卒業」するための、最後の対面を果たすために大山に行つたと考えられるのである。

四 大山のクライマックス

大山の自然に触れ、今まで知らなかった新しい世界が開けた喜びによつて、しこりが取れて行くことを感じ始めた謙作は、直子に手紙を書いて知らせる。

これからも私は怒り、お前を困らす事もあるだらうが、それにはもう何の根もない事を信じて貰ひたい。そんな事は決してないつもりだが、山を下りると又元の木阿弥になるやうではつまらない。私は此気持をもつと確^{しか}り、本物にしてお前の所へ還るつもりだ。それもそう長い事ではない。そしてお前には色々な意味で本統に安心して貰ひたい。実際これまでの事も馬鹿々々しいといふ事はよく知つてゐるのだが、病気のやうに一ト通りの経過をとらねば駄目なものだ。今の私は本統にその経過をとり終つた。もう何の心配の種もない。(第四の十六)

直子を赦すための「経過」を辿り終え、「もう何の心配の種もない」という謙作は、直子を赦すということに関しては早い段階で解決して見せた。しかし、謙作はここで直子のもとに帰る訳にはいかない。母

からの「卒業」という本当の目的を果たすために、どうしても大山に登らなければならなかったのである。

その後激しい下痢を起こしながらも、計画していた大山登山を実行した謙作は、一時間ほど登つた所で一緒に登つていた会社員達と別れ、自然に吸込まれて行くような感覚を覚える。

疲れ切つてはゐるが、それが不思議な陶酔感となつて彼に感ぜられた。彼は自分の精神も肉体も、今、此大きな自然の中に溶込んで行くのを感じた。その自然といふのは芥子粒程に小さい彼を無限の大きさに包んでゐる気体のやうな眼に感ぜられないものであるが、その中に溶けて行く、——それに還元される感じが言葉に表現出来ない程の快さであつた。(中略)

彼は今、自分が一步、永遠に通ずる路に踏出したといふやうな事を考へてゐた。彼は少しも死の恐怖を感じなかった。然し、若し死ぬなら此儘死んでも少しも憾むところはないと思つた。然し永遠に通ずるとは死ぬ事だといふ風にも考へてゐなかつた。(第四の十九)

この大山のクライマックスについて、「母恋い」の系列に属する「母性回歸」を読み取つて解釈する論考がある。「亡き母と直子と自然が一つに」なり、「母性を確実に所有した」とし、そこに作者の「母性回歸願望」があると論じた遠藤祐^{註19}や、「純粹な母の国が生成し、幼児のような性的不能状態に陥つた重病人、謙作の周囲には、直子をはじめとして新生児を看取る母にひとしい不滅の女たちが、刻々に、その数

をふやしはじめる」と述べた種村季弘^{〔註1〕}、「母と大地が合致」し、謙作が幼児に退行したとする酒井敏^{〔註12〕}、謙作が「小さな芥子の種に化して、宇宙的子宮に埋め／植え込まれ」、「直子の赤ん坊になった」と指摘する萩原孝雄^{〔註13〕}などがある。また江種満子は、「直子を救うために人間の女の中に母を望むことを断念し、大山の自然を母とする悟達」^{〔註14〕}へ至ったと論じている。この江種満子の論は、身近な女性達に母性愛を求めることをやめたという意味で、「人間の女の中に母を望むことを断念し」た点については同感出来るものであるが、「大山の自然を母と」し、最後まで母に執着して終わると解釈している点では同意出来るものではない。

謙作が自然との一体感を味わうこの大山のクライマックスは、確かに母なる自然に溶け込む「母性回帰」だと解釈することが出来るだろう。これらの先行研究は、『暗夜行路』を「母性回帰」することによって「幼児退行」して終わる物語＝母恋い物語であるとしている^{〔註15〕}。

だが、大山のクライマックスで重要なのは、大山行きが「死」と「再生」の旅であり、この体験が「浄化」という要素を含んでいるということである。大山に登って体調に自信の持てなくなった謙作は、一緒に登って来た会社員達と別れ、座り込んだ。一人になった謙作に、会社員達の「六根清浄、お山は晴天」(第四の十九)という掛け声が響いて来る。「六根清浄」とは、『修験道辞典』^{〔註16〕}によると、迷いの根源である六官を清浄にすることによって迷いを取り去り、真実の道を開こうとすることだとされている。この「六根清浄」という掛け声は、

謙作が自然に吸込まれて行く直前に、まるでこれからの「浄化」を予告するかのように象徴的に配置され、そしてこの掛け声を合図に謙作は自然に吸込まれて行く体験をするのである^{〔註17〕}。その後寺に戻った謙作は、「精神的にも肉体的にも自分が浄化されたといふことを切りに感じ」(第四の二十)る。「母性回帰」と「浄化」とをあわせ持つこの体験は、母胎に見立てた山の洞窟などを出入りすることによって新しく生まれ変わろうとする擬死再生儀礼、いわゆる胎内くぐりのような体験なのではないだろうか^{〔註18〕}。謙作は今まで、母性愛を求めて母親探しを繰り返し、そのことによって不幸な出来事を引き起こして来た。そのため母からの「卒業」の必要性を自ら認識して大山に赴き、大山の自然に抱かれることで、母との一体感を味わい、母に愛されたかったという根源的な欲求を満たして母親探しにピリオドを打った。そして同時に、一旦母胎回帰し、母の胎内を通過して生まれ変わることで、直子との人生をやり直そうとしたのである。謙作にとつての「死」とは、「母からの卒業」を意味し、「再生」とは「直子との再出発」を意味していたのである。

大山行きの目的を果たし下山して来た謙作は、今までの謙作とは違い、何か不思議な力でも身に付けたかのように、直子が寺に駆けつけて来たことを察知する。そして直子に「一人で来たのか?」「赤ちゃんに連れて来なかつたのか?」(第四の二十)と問い掛ける謙作には、父性愛の芽生えを確認することも出来るだろう^{〔註19〕}。それはまさに、大山行きの目的であつた母からの「卒業」が見事に成し遂げられたこと

を証明している。そして謙作の変化を感じ取った直子の口から、「助かるにしろ、助からぬにしろ、兎に角、自分は此人を離れず、何所までも此人に随いて行くのだ」(第四の二十)と、夫婦としての再出発の誓いが語られることになる。こうして謙作の母親探しの「暗夜」は終わり、直子との新たな人生の夜明けが告げられたのである。

『暗夜行路』における母の問題は、三好行雄が指摘したような「母から逃げてゆく」といった消極的なものではなく、また最後まで母を求めて幼児退行で終わりを迎える母恋い物語でもなかった。『暗夜行路』という作品には、「母を恋うる記」に終わらない可能性が秘められているのではないだろうか。

※『暗夜行路』本文の引用は、『志賀直哉全集』第四卷(岩波書店、平成十一年三月)に拠る。また、引用中のルビは全集に拠るものとし、必要と思われるもの以外は省略した。

注1 進藤純孝解説『志賀直哉集』(角川書店、昭和四十六年一月)。

2 越智治雄・紅野敏郎・西垣勤・三好行雄「シンポジウム『暗夜行路』をめぐる」(『国文学 解釈と教材の研究』、昭和五十一年三月)。

3 荒木正見『尾道という場所論 志賀直哉・小林和作・大林宣彦の風景』(中川書店、平成五年八月)は、「経済的先進地として、日本でも特筆すべき近代化の進んだ」尾道に志賀直哉が引き付け

られたとする考察を行っている。

4 宗像和重「遠くへ、そして一人に―『城の崎にて』私注」(『国文学 解釈と教材の研究』平成十四年四月)は、佐々木靖章「城の崎にて」(『一冊の講座 志賀直哉 有精堂、昭和五十七年十月)の「極言すれば、『暗夜行路』後編の大山の叙述に至るまで、志賀文学の核心は関西のいくつかの空間を固有名によって定着化していく姿勢で一貫している」という論を援用し、志賀文学は、「山陰本線の全通を記念して」作られた「『山陰回遊列車』という企画」の「行程をなぞってきた」と述べている。

5 宮家準編『山岳宗教史研究叢書12 大山・石鎚と西国修験道』(名著出版、昭和五十四年四月)。

6 死んだひとの靈魂が、山へのぼり山中や山上にとどまるという信仰によって、山は他界と見なされることがある。

7 宮家準『修験道思想の研究』(春秋社、昭和六十年二月)。

8 三木利英『志賀直哉と大山―こころの軌跡を求めて』(錦正社、昭和五十三年五月発行、平成三年三月第三刷発行)。

9 生井知子は、「志賀直哉と父―『暗夜行路』を中心に―」(『国語と国文学』平成六年八月)において、「『暗夜行路』のストーリーは、謙作のインセスト願望を父なる運命が罰するという構図によって支配されている」と述べている。

10 遠藤祐注釈『志賀直哉集』(角川書店、昭和四十六年一月)。

11 種村季弘「時任謙作の去勢願望」(『太陽』昭和四十八年一月)。

12 酒井敏「母」の胸への回帰―『抱かれる』イメージを軸に―

（紅野敏郎・町田栄編『志賀直哉「暗夜行路」を読む』青英舎、昭和六十年七月）。

13 萩原孝雄「『暗夜行路』における子宮の（脱）形而上学」（平

川祐弘・鶴田欣也編『暗夜行路』を読む 世界文学としての志賀直哉』新曜社、平成八年八月）。

14 江種満子『暗夜行路』と『伸子』をめぐる一面（『志賀直哉全集』第十七巻 月報16、岩波書店、平成十二年七月）。

15 生井知子（注6に同じ）は、「一種の母胎回帰」ではあるが、「幼児退行を以て終わる訳ではない」と指摘している。しかし、大山のクライマックスを「死の体験」と解釈している点で本稿とは異なっている。

16 宮家準編『修験道辞典』（東京堂出版、昭和六十一年八月）。

17 谷口幸代『暗夜行路』の〈冒険〉―まなざしの変容―（『昭和文学研究』平成十年九月）は、謙作の「未だ嘗て何人にも見た事のない、柔かな、愛情に満ちた眼差」を前編最後の「慈眼視」と「照応」するものだとし、「六根清浄」という言葉もそれらと「響きあっていた」と指摘している。

18 福田アジオ編『日本民俗大辞典』（吉川弘文館、平成十二年四月）によると、「元来は山全体が母胎に見立てられ」ていたとある。

19 伊藤佐枝「暗夜行路という巨大迷路」（『論樹』平成七年九月）

に同様の指摘がある。

（はなおか ちづき／博士後期課程二年在籍）